

## 六 闘病生活と学校経営

と 脊柱カリエス  
診 断

昭和二十二年（一九四七）十月、淋巴腺りんぱの摘出手術を受けた大内外科病院の本院は、すでに広島市大手町に移転されていたが、その分院（分院長・吉永時義医師）に診てもらいに行ったところ、左大腿部に注射針を入れたら、濃い膿が出た。診断の結果、脊柱カリエスという病名だった。脊柱の腰椎の第四と第五

が腐って、それが膿となり、大腿部にたまり、歩けないとか腰が痛むという状態になっていたのである。

吉永分院長の言葉は、「ずいぶん病気は進行しているので、本院の院長に診てもらってくれ。」とのこと。私も吃驚（びつぱん）して、その翌日可部線の電車で大内病院に向かった。

途中の電車の中で小西春子夫人に出合った。小西夫人は私の病状を聞かれて、いたく労って下さった。小西夫人との御縁は、私が昭和十七年県庁に勤めるころ、広島県立七塚原修練農場を会場に、満蒙开拓義勇軍の伴侶者として希望する女子青年の講習に時折行っていたとき、春子夫人が七塚原修練農場（女子部）の教官としてお勤めになつたので知り合つたのである。昭和十八年に小西義郎家に嫁られるお取り継ぎをさせてもらつてから、なお一層ご懇意の間柄となつたのである。前述の昭和二十二年十月の手術前より、身体の調子が悪くて臥せていたとき、春子夫人が見舞つて下さり、そのときのお言葉に「あんなに元気で活動家の先生が、こんな病気で横たわつておられるお姿が痛ましくて痛ましくてたまりません。」と涙を流し、優しいお言葉をかけて下さった。そして、お見舞に銀飯で海苔巻のお寿司を持参下さつたのを、有り難く美味しくいただいた味がまだ口の中に残っている。

そのとき、おんぶしておられた赤ちゃんが、現在では二児の母となつていらつしやる。小西夫人の言葉が身にしみて有り難く思っているうちに、横川駅に着いた。

横川駅で下車し、市内電車に乗り替え市役所前で降り、大内病院に行つたが、その間の時間がずいぶん長くかかり苦しかった。院長先生の念の入つた診断の結果は、「これは大変、すぐ入院せねば死んでしまふ。」という。

### 入院一カ年の療養

家の方へ電話を入れて、入院の用意をして来てもらうように頼み、さっそく長男と当時のわが学園の療養 教員新尾一枝氏とで、あれやこれやと身の廻りの品を取り揃えて持参してくれたのである。

そのとき、二人は「学校の事は何も心配しないで、ただただ養生に専念してくれ。学校を閉じるようなことはせぬ、

責任を持って留守を守るから。」と力をつけ励ましてくれた。

一方、里の兄のところへ『ビヨウキニューインシタ』という電報を入れた。さつそく、甥の市川寿太郎が兄の使いで病院を訪れてくれた（兄は昭和十八年からリウマチで臥せていたので身体が動かないのと、元気なころから仕事のこと以外、すなわち身内の者の世話は、万事この市川寿太郎に委ねていたのである）。寿太郎が病院に来て「おじいさんは（兄のこと）、ミキが学校を創めて金が足りなくなつて病氣だといつてよこしたのかもしれないが、とにかく行つて見てやつてくれ。そして身体が悪いにしても、またお金が足りないにしても、いずれでもよくよく事情を聞いてきてくれということだったのだが、本当に病氣だったの。」という。私は「嘘などは言わぬ。金が足りないのを病氣だなどと言つて心配かけるよりか、あつさりとお金が足りないと言つてよ。」と言つたようなことであつた。

とりあえず電報どおり病氣ということで、病氣の療養金として五万円持つてきてくれた。当時、千円札はまだ無いくらなので、百円札の五万円束は随分かさが大きかつた。その札束を枕辺に置いて、「何も心配せず養生にひたすら専念せよとおじいさんの伝言だ。また親類中の者もそう言つてゐるからの、大事にしなさいけん。みんなが心配しとるけんの。おじいさんは、あの子はやろうと思つたことはやり通す子だから、自分の身体の弱いことも無理なことも忘れ、無茶苦茶にやるので体をメーデー（身体を悪くして）しまうのだ。どうもならん」と言つとられた。とにかく用心に用心をして病氣を治して、元氣になつたら学校のことも出来るんだから、今はただ病氣を治すことだけに力を入れることよ。」等々、甥は私の病体に心を残しながら病院から去つた。

私はたまたまなく淋しかつた。神ならぬ身。終戦後の頹廢した道徳、混乱した世相の中に、成長する若き女性を正しく、強く、かつ日本女性の美徳を失わぬ女性に育てることを目指して立ち上がったのも束の間、一週間に於いて倒れてしまつたことは誠に残念至極である。何くそ、倒れたままではならん。預かつた十八名の生徒や父兄に対して、

また学校設置認可をして下さった県当局に対しても。三月の終わりになって学校設置認可申請書を県に持参してお願いしたとき、武田さんがやるんなら心配はないだろうと言って、現地審査も来られないで私を全面的に信頼し、書類だけで認可して下さいことから考えても、このまま起き上がられないようでは相済まん。何としても回復せずにはおられぬ身体だ。起き上がるぞ」と大内病院の二階七号室のベットの上で堅く誓ったのである。

看病は、夫の武田の妹の玲子が当たってくれたのであるが、物の無いときで、看病もずいぶん苦勞をかけることが大きかった。一年間、懇ねんこうに真心こめて看護してくれた恩は、決して忘れてはいない。

また、武田の母にも心配かけたことはもちろん、一年間、自分の末娘を看病に当たらせている間は、精神的にも肉体的にも苦勞が多かったことと思う。母は、実に優しい、心の美しい人であった。昭和四十三年（一九六八）七月二十七日、八十六歳の生涯を閉じたのであるが、病弱な上に学校経営という大きな仕事を持っている私のこと故、逝かれるころは何にもようしてあげられなかったことが心残りでならぬ。

私の病氣は、何しろ病氣そのものが悪質な上にとでも進行しているので、医師も周囲の者も全快には至らぬであろうと考えていたらしい。とにかく養生には最善を尽くさねばと、医師はもとより周囲の者も一生懸命になってくれた。

ストレプトマイシンがこの病氣に良いということであるが、当時それが医師でさえもなかなか手に入らぬころであった。それを里の兄や姉がずいぶん苦勞して特別なルートをたどって手に入れて、十本ずつ持参してくれていた。当時、日本にはまだ少なかつたらしく、したがって高価であった。一本が一万三千円で、結局五十三本使ったということである。ストレプトマイシンが手に入ると、すぐ里の姉が持って病院を訪ねてくれて、「早く良くなれよ。金はなんぼうかかってもええんじゃけんの一。おじいさん（兄のこと）もそう言いよってじゃけんの一、元氣を出さんじゃけんよ。」と励ましてくれていた。その姉が見舞って帰った後は無性に淋しくて淋しくてたまらず、生きる力を失って



新尾一枝先生（前列中央）と1期生たち 1948年

しまうようなこともあったが、また、何くそと元氣を取り戻すのであった。

一方、学校の方は主任教諭の新尾一枝氏が中心となって、教育経営・経済経営の一切を担当してくれていた。新尾教諭は前述の如く、私の教え子で、教員になってからも私を親のように思い慕ってくれていたし、また教育にも熱心であった。私の教育方針もよくよく飲み込んでいた。また長年にわたって私の訓化も受けているので、私がやろうと思っていたとおりの教育（天賦の特性の伸長と謙虚で優雅な女性の育成）をしてきてくれた。そしてまた、少なくとも週一回は必ず病院を訪れて病氣を見舞ってくれるとともに、学校のことについてきめ細かい相談をしてくれるので、臥せていても学校のことが手にとるように分かった。そして私は、あれよこれよと理想を描き希望を持ちつづけながら養生が出来たのである。氣力は人一倍持っているが、病氣が病氣なのではかばかしくはいかなかった。

二十三年十月九日、大内病院長先生の御長男が出生されたことを聞いたことは覚えていますが、その日私は意識を

失ったのである。そして翌年の一月五日に意識を取り戻したのである。すなわち三カ月にわたる長い間、意識不明で死線をさまよっていたのである。この三カ月間は、だれがどうしてくれたのか、だれがどう言ってくれたのか、まただれが見舞ってくれたのか、全然知らない。

里の兄の長男の秀夫を始め、親類中の者はもちろん、知人、教え子等々、もう駄目ということで見舞って下さったらしいけれど、分からなかった。ただその三カ月間のことがかすかに頭に残っているのは、現実から離れた夢かまばろしか知らぬが、学校で何かはつきりはせぬが教えているようなときと、学校に走って行っているところと、もう一つは、お寺で葬式をしているところへ大内病院長先生がモーニング姿でお経をあげておられる光景、そしてお坊さんのところへ私を引き取りに来て下さったところや、私が川を泳いで渡っているところである。多分、世にいう三途さんずの川を渡ってあの世に行っていたのであろう。

#### 入院中の周

#### 困の動き

家の方では、葬式の用意のために米を舂くとか、薪を用意するとか、また障子の張り替えをしたりとかという相談会もしていたとか。また、女子の先生は喪服を家に取りに帰るとか、また送ってもらったりして、葬式の用意をしていたということである。

そのころ、私が死んだら学校を閉じるかどうかという話が、教員と長男の間で持ち上がったらしい。長男はまだ文理大の三年であったのだが、「母が死んでも母の意志を継いで学校は続ける」と言ったということを新尾一枝氏が、「先生、喜びなさい。坊っちゃんが固い決心をしておられますよ。」と涙を流しながら、また「もちろん私も、たとえ先生が亡くなられても坊っちゃんに協力して、立派な学校にして先生を安心させてあげようと決心していたのです。」と申してくれた。

学校所在地を 開校時点においては、すでに校舎として購入している古市町の建物を三カ月後の六月までに可部古市町に移す に移す予定が、前述の如く、開校式一週間後に私が病魔で倒れ入院加療を要する身となったので、

予定通りに校舎の移築が出来なくなった。しかし、高宮中学校借用期間は三カ月の約束であったので、どんな事情があろうとも三カ月の村長さんとの約束は果たさねばならぬので、七月一日に夏休み直前ではあったが古市町に学校移転をすることにした。

そこで、高宮中学校へのお約束は果たすことになっても、一方の生徒や父兄には義理が立たぬことになる。それは、学校所在地は可部町として募集したのに、年度の途中でしかもわずか三カ月間で移動するなんて申し訳ない。“病床の中でいろいろと悩んだあげく、結局、生徒や父兄に理由を述べ、理解を求めより他に道はないと心を決め、新尾・藤原教諭の二人と長男を病院に寄越してそのように運ぶようにということを依頼した。

そのとき、少しでも生徒や父兄に迷惑を少なくする意味で、可部町およびそれ以北の生徒に対しては、可部から古市までの交通費を学校が負担することにした。生徒も父兄も実情をよく理解してくれて、一人の不平者もなく、また退学者もなく、全員古市に無事移動することが出来、授業を続けたのである。

その時点、現場にいて直接この大変動の事に当たってくれた新尾・藤原教諭の苦勞も並大抵ではなかったであろうと思ひ、感謝している。

### 第一回卒業式

発足時の学則では、一カ年制度の速成科があったが、その速成科の生徒が六名いた。この人たちは本校の第一回卒業生である。

第一回の卒業式は三月二十日。私はまだ病院にいたので、もちろん式には出られぬので、式辞の内容を長男に言つて書かせ、校長代理を長男が務め、無事第一回生を送り出したのである。六名の卒業生には誠に申し訳なく思つてい

る。入学後一週間して入院し、彼女らに何も直接お世話が出来なかつたことが、今もなお心残りがしてならない。

退院して学 一月五日頃はまだ意識が朦朧としていたが、いよいよ意識がはっきりしたのは一月中旬頃だつたと校に戻る 思う。そのころからだんだんと良い方向に向かつた。

三月になって、大内病院長は「気分もすっかりしてきたし、腫もあまり出なくなつたので、この病氣は一年や二年で治るものではないのだから、帰つて氣長に養生したが良からう。」と言われるので、三月三十一日、骨と皮の身体を（大内先生は「骨筋皮子さん」と言つておられた。）担架に乗せて自動車に運ばれ、自動車に仰臥して学校に戻つた。丸一年間の病院生活は、長い長い期間であつた。その間にさまざまなことがあつた。

退院して帰つても、私は全然動けない。もちろん病氣は全治してはではなく、ただ死線を越えたというに過ぎない。これからの養生も大いに氣をつけないといけないことを医師からよくよく申し渡され、約束して退院したのであるが、学校に戻れば養生だけに専念というわけにはいかぬ。また、自分の身体は動けぬが、頭は平常通りであるので、学校のことをしたい。コの字型校舎の中央の階下に、一室を教員室として、その教員室の窓側に古い材木を使つた手製のベツトを置き、その上にギブスをのせ、そのギブスの中に仰臥して養生しながら運営に当たること九九年、しかし希望の毎日であつた。

退院後は、可部の分院の吉永時義先生が、看護婦を連れて往診に来て下さるようになった。

校舎一棟  
購入増

古市の建物はコの字型になつていて三棟あつたが、発足時は資金の都合と前述の如く可部町を学校の所在地としようと思つていたので、そのときの建物移動等のことも考え、とりあえず二棟だけ買つていた。

その校舎に充当した建物は、原爆にあつているので、屋根の瓦はずれ、壁は落ちてゐる。あちこちにガタがきてい



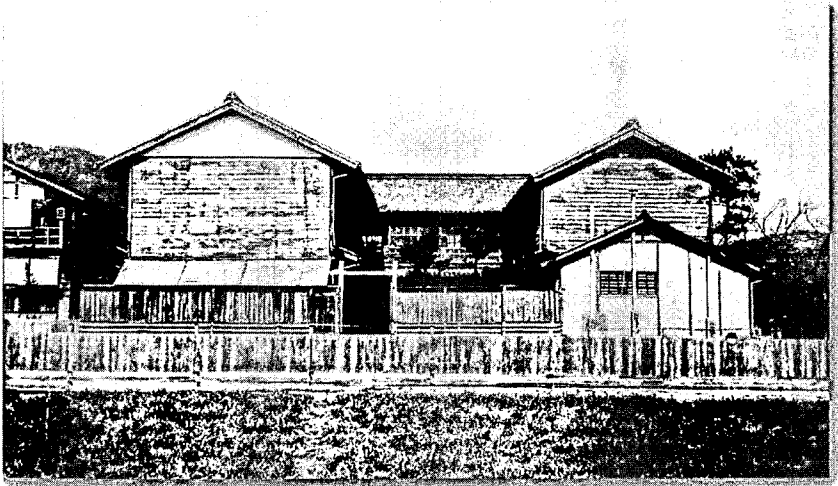
て修理を要するところが沢山あったのだが、その修理費も用意できないので、雨の漏る所へは洗面器で雨受けをする、壁の落ちた所を素人の長男の手で塗るとか、また或るときには、屋上に上がって瓦のずれを直したりして、一時しのぎをしていた。

しばらく古市町が動けないとなれば、残りの一棟も買っておかないと、その建物を他の者が買ってそこに入られたら、教育の場として不合理な点も出てくるからと思い、そこで退院後、ただちに古市町長に來校してもらって色々と交渉し、資金的にも随分と無理をして買い取ることにしたのである。

教員室にベットを持ち  
カリエスと診断されたときには、  
込み指導経営に当る  
大腿部に膿が二リットル以上も蓄

まっていたのだが、入院してすぐに大腿部を切開して膿を出してもらった。入院中の一年間はもちろん、退院後も少量ずつ膿が出ていたのだが、一年くらいで止まったので治癒する見込みがあったと、吉永先生がおっしゃって下さったので、養生にも張りが出た。

しかし、ギブスの中へ仰臥のまま微塵も動けないので、便所も寝たまま一人で処理した。もちろん、食事も、読むことも、書く



開校から3カ月後に移転した広島県可部女子専門学校の古市校舎 1953年当時

ことも、計算も仰臥のままやっていった。三年目くらいからは、寝ていて刺繍や摘みの額などを生徒に教えていた。また、床軸の刺繍台を腹の上のせて生徒に持たせ、師範していた。

目の見えない人、肢体の不自由な人たちが、完全な身体の人たちとあまり変わらないように、何でもやれるのを不思議に思っていたが、人間は一部分に故障が起きれば、他の感覚が鋭く働いてくれることを、九年間でよく体験した。

九年間はまったく動けなかつたけれど、経営の一切（教育経営・経済経営）をやってきた。朝、先生方が出勤して来て下さるのが楽しくて待ちどおしい気持ちがあった。毎朝の職員朝礼には、その日の計画を話し合い、週番教師からの反省や注意事項を聞くなどして、現実を踏まえての指導を大切にしてきた。県庁の文教係の先生から「寝ていて良くやる。何でも用事があつたら言え、何時なりとも出向いてやるから。」と同情と激励のお言葉をいただき、感激と感謝に満ちてやっていった。

新尾 一枝教諭の  
退任、そして逝去

新尾 一枝教諭は、本校創立当初から学校運営の中核となり、私の入院中はもちろん、学校の存続のために孤軍奮闘してくれた。随分と苦勞をかけたが、おかげで開校二年後、ようやく学校

も明るい見通しがつき始めた。その二十五年三月末、新尾教諭は退任せざるを得なくなつた。



広島県可部女子専門学校創設当時のミキ先生  
ベッドの中で教育にあたる 1949年

それは、彼女は若いとき、不幸にも初婚に破れ、可愛い女の子を婚家に残し実家に戻ったのである。その後再度教育界に戻り、教員生活前後十八年（公立に十六年、本校に二年）に及んでいたが、老母から「四十歳にもなる娘をそのまま残してあの世には行けないから再婚してくれ。」と奨められて、本人にとっては今になってという気も働き、本意ではなかったのだが、親を安心させるために再婚することになったのである。

私の両腕となつてくれてきた彼女に去られることは、火が消える思いがすると同時に、別れることがたまらなく辛く寂しかった。しかし、人間の一生にかかわる結婚のこと故、学校や私の都合ばかりいつておれないと考え、送り出すことに同意したのである。

退任した翌年の昭和二十六年（一九五二）十一月十六日、新尾一枝氏が逝去された（急性の腸結核であった）。本校にとつて恩のある氏を失つたことは、誠に哀悼の情に堪えぬものがあった。

その後、一回忌、三回忌、七回忌の命日には学校独自で法会を営み、供養して、御恩に報いる一端としている。死去当時は、私も病床にあつたので会葬できなかつたが、健康が回復した三十四年十一月、呉市阿賀町字原の墓地を訪れ、久方ぶりに対面した。ものいわぬ墓石に向かつてしばらく話しかけて、心ゆくまで菩提を念じて下山したときは、なんともいえぬ安堵と寂しさを感じた。

#### 開校二年度、三年度の生徒 入学状況と教員の陣容

初年度の入学応募生を八十名見込んでいた。しかし、机などは少し余分にと思ひ百名分を用意した。ところが十八名（速成科六名、本科十二名）の入学者であつた。

いかに考えが甘かつたかをつくづく反省していたので、二年目もその程度ではないかと心配していたところ、三十八名の入学者であつた。新入生を二学級に、二年生の十二名を（速成科六名は卒業した）一学級に、計三学級編成で、二十四年度授業を開始した。

教員陣容は、洋裁担当の藤原サダ子氏が結婚のため二十四年の三月末で退任されたので、後任に私の呉市での教え子の垣内フミ子氏を、他に深田安子氏を増員し、計三名の専任教師と、非常勤講師に茶華道の大下高貴氏、家事科の藤田富士枝氏、一般教養学科の武田学千・三浦富登氏の四人で、少数精鋭とまではいかぬにしても、徹底した教育ができた。

こうして二十四年度も無事に終え、第一期生の十二名もめでたく卒業させた。

三年目の二十五年度は、本科生五十三名、研究科生四名を受け入れた。本科は一年二学級、二年二学級の四学級編成とした。教員は新尾一枝氏の後任として、やはり教え子の姪である藤本悦子氏を、さらに小田富美江氏、大原百合子氏の二名を増員した。一般教養学科担当は、前年度までは長男武田学千とその友人の三浦富登氏で、学問研究のかたわら担当していたが、いずれも文理大を卒業して、三浦氏は就職、長男も続いて文理大に研究生として残る予定であったが、恩師の県立可部高等学校長



開校3年目に入ったころの教員と生徒 1950年

井上清先生から可部高校の非常事態に対応するために是非来てほしいという強い要望に応えざるを得なくなり、それに応じたので、その後任として阿部善五郎氏・久保田達三氏を招聘し、教員の陣容も整え、希望の二十五年度の授業を開始したのである。

本学園発足ごろには、一般的に日本国民の服装も戦前と変わり、女子も和服から洋服にと一変してきた関係で、洋裁学校なるものが乱立していた。わが広島県可部女子専門学校なるものも左様に解されていたようであるが、本学園は前述の如き主旨のもとに発足し、「心を育てる教育」「人づくり」が教育の根幹であるので、一般教養学科にも充分に時間を充当していた。特に道徳教育の徹底を期するため、倫理科を課していた。当時、中学校の先生方から「武田学園の教育は古い修身公民科らしきものをやっているそうな、云々」の声があつた由であるが、私は「古くはない、道徳教育を抜きにした教育は駄目だ、十年先になれば全体に取り入れられるようになる。」と言つていたものである。まさしくそのとおりで、十年もたないうちに道徳が中学にも高校にも正科となつた。

寄宿生収容 二十五年度は生徒数も前述の如く増加したが、その中には寄宿生もいたのである。

第一歩 それは、戸山村（現在の沼田町）から五名、小河内村（現在の安佐町）から四名、計九名の舎生で、もちろん自炊であつた。自宅より主食の米、副食の野菜類一切を持参し、二班（戸山班・小河内班）に分かれた。これらの生徒は、授業が終われば輪番で炊事をするのである。舎生の居間は、昼は教室、夜は寄宿舎で、炊事場はその年は狭い庭の一隅にトタンの屋根をして、そこに瓦のくどと七輪とを据えて食事を作つていたのである。そのころのことが今なお目に浮かぶ。

本校の教育の目標である、質素堅実な人づくりの精神に則り、このような不自由を忍び、粗食に甘んじ、ひたすら自己修養に精進努力する生徒を頼もしく感ずるとともに、将来への期待も大であつた。

## 校舎の改造と 設備の増設

この年に校舎の一部を改造した。建物が和室用に来ていて、教室全体が座敷であったのだが、洋裁室二室を立式にし、机も立式の机を五十個、河戸の寺本木工所に依頼して作った。ミシンも二台で出発したが、これも二台増設して四台とした。かように教具や標本なども少しずつではあるが増設し、授業の充実を図るよう努めるなどして、この年から学校発展の緒についたという感じであった。

## 移動作品展開催

### (四年間継続)

創立初年度から、本校教育の実状の一端なりとも、父兄並びに地域の人々に知ってもらおうとにも、生徒の技術練磨の向上にもなると考え、毎年秋季に一回、生徒の作品展を催していた。父兄からの人気を博していたが、さらに一歩進めて、広く公開してみたいと考え、山県郡、高田郡、佐伯郡の中学校へそのことをお願いに参つたら、大変歓迎して下さいました。二十五年度の生徒募集期から始め、すなわち中学校の二、三学期の父兄会のある日を利用して作品展を行った。本校教育の実力のつく実態を、生徒やその父兄そして先生方も知って下さって大変な好評をいただき、年々応募者も増加してきた。

しかし、この催しをするのに、本校教員や生徒は苦勞したものである。その作品を持参するのに三輪車を借り、朝早くそれに教員も乗って山坂の道を越えて行き、作品を展示し、その日に生徒父兄にご覧にいれ、夕方は帰ってくるとか、またはその中学校の都合によっては、一晩泊って二日間開催するとかしていた。当時は現在のように交通も至便でなく、道も悪く、また宿泊所もなく、もちろん費用も最小限に止めるといった状態で、なかなか教員にも苦勞をかけていたが、当時の教員たちは何の不足もいわず、希望に燃えてやっていたのだいた。感謝せずにはいられない。

当時の展示品の主なるものは、和裁・洋裁・手芸（日本刺繍・摘み細工・染色・生花等）等であった。父兄はこの我が校の作品展を見にくるのを、年中の楽しみと喜びとされていたようである。父兄同士の間での会話に「早く田植えを済ませて、女専の展覧会を見に行きましょうでー」。当日は一家総動員で、ご近所の方々まで誘って来て下さっ

ていた。また、県総務課の文教係の先生もおいで下さって作品をご覧になり、「沼の蓮池の蓮の花が咲いているようだ。」と感嘆、また感嘆とお言葉をお賜るなど、感激の極みであった。

このちっぽけな学園の行事に、はるばる遙々県官が来校下さることは、現在では想像もつかぬことである。思うに、私が病床にありながら学園経営に腐心していることに同情下さり、激励の思召しからだと思う。御来校下さっていた県官は、井上清、信田、細川の先生方であった。この三人の先生方には、このことだけでなく、本学園の教育・運営に、色々御配慮、御援助、御鞭撻を賜って、今日に及んでいることを感謝している。

古市校舎時代のこの行事は、三棟の校舎全部、教員室までも使用していた。当時の私は病臥の身であったので、開催二日間は、階段下の一畳半ほどの穴みたいな所に床を運び、そこで過ごすというありさま。父兄の方が見て「まあ先生、こんな所で。」と涙を流され、慰め、励まして下さっていた。

作品展示の準備も、ギブスに仰臥のまま、陳列の配置、作品の種目・点数、それに必要な器具（器具もまだ不完全な時代なので、色々工夫していた）、陳列の方法等すべて計画を樹て指示していた。生徒も教員も、和協一致、夜を徹してやっていた。夜明け方に陳列が終わった年もあった。陳列が終わったら、教員たちは私を担架に乗せて会場を一巡させてくれていた。これは教員側では、校長の検閲を得るといふ気持ちからである。私は、一般へ公開する責任者としての立場からのことであった。

この行事は、三回までは展覧会と称していた。四回目から学園祭と名を変えた。そのころには作品展示だけでなく、演劇の披露、廃物利用品販売、家庭不用の小切布等の工夫創作品（袋物・人形等）、食堂開設、調理実習の演習の意味でやっていた。これらの出品も、どこまでも教育的見地からのものである。こうした展覧会（学園祭）時に展示するための作品製作だけでなく、専門学校に相応し、専門的な高度の技術を身につけさせる意味から、洋裁では男子背

広、女物ではウエディングドレス・カクテルドレス、和裁では男子物の紋付羽織・袴、女物の留袖・振袖まで進めていた。また手芸においては、精神鍛練の意味も込めて、日本刺繍を履修させていた。これは正科のみでなく、課外で盛んにやっていた。

夏休暇等には、クラブの者(三、四十名)は、四十日の休暇を全面的に返上して、泊り込みで昼夜兼行、夜に眠くてどうにもならない者がめいめいに床も延べないで、その位置で三十分、一時間といった程度の時間を休み、また起きてやるといったように、一晩中休む時間は、合わせて二時間くらいであった。もちろん私も、仰臥ではあったが起きていた。そうした特訓で休暇中に出来る上がる作品は、教材も自由であったので、額・鏡掛け・袱紗ふくさ大中小・床軸・衝立等の大物で、豪華な作品ができていた。中には同じ出身中学校生四、五名で合作して、寄贈していたグループも沢山いた。そんなとき、中学校の先生から「君たち、こんな大きな手の込んだ立派な作品をいつ作ったのか。」と不思議がられてお尋ねになり、「何にしても、身体だけでなく、心も技もずいぶん成長したのー。」とお賞め下さっていたとか聞いて、私も喜んだものである。また親御さんたちは、「材料費を出すときには大儀かったが、いいのが



刺繍の時間(左)と見事に仕上がった作品(右) 1954年



出来たのー。ええ記念になるのー、嫁入りには持っていきけるのー」、また家によっては「嫁入りに持って行かずと家においといてくれーやー。」と言われるということであった。こうした作品を作り、毎年展示したのを父兄が見られて、我がお子さんに「何でも、おまえも一つ記念に在学中に作らせてもらっておけーやー。」と言われる方も多くなった。また一般の方からも、生徒さんに作ってもらえまいかななどの依頼もあつたが、これには応じる時間がなかつた。

この刺繍の指導は、二十五年度には私がギブスベツトに仰臥のまま、前述の如く大きな刺繍枠を腹の上に乗せて示範しながらやらせたが、二十六年度からは、有馬富士江氏が加勢してくれるようになったので、非常に助かるとともに、ますます盛り上がり拡充してきたが、三十二年に高等学校設置に続いて三十七年には短期大学を設置したので、この専門学校は新設の短期大学の母体となり、廃校となつたのである。すなわち発展的解消となつた。専門学校は術の方がウエイトが高かつたのであるが、大学となると術よりも学の方へウエイトを強く置くので、前述のような作品はできなくなつた。専門学校時代は、本学園建学の精神にびつたりの間人教育が出来ていたと思ふ。

我が専門学校は、各種学校に準拠して二十三年に設立したのであるが、他の各種学校とは内容を異にし、旧制専門学校に近い内容で、すなわち全人教育ということを根底においていたので、一般教養学科の全分野にわたる単位修得とともに、専門学科の専攻(被服)をしていたのである。ちょうど現在でいえば短大の被服科に技術を高めたようなものであつたので、就学する生徒たちは他の和洋裁学校に行く人たちの目標とは変わったものを持つていた。いわゆる旧制専門学校に進学するような構えの者が多かつた。したがつて気魄のある、家庭環境もよく、また性格もよく、素直で純朴で向学意欲も旺盛な生徒が多かつた。このころの卒業生は、皆一段と際立つてよき社会人、よき家庭人となつて、社会のために精一杯に働いて、それぞれの場で喜ばれ重宝がられている。

## 二十六年度教員 増と経営の実態

二十六年度には、前述の移動作品展等により、本校教育の価値も高まり、四月の入学者は一〇二名を数えるに至った。遂に七学級となったので、その年から教員を二名増員した。広島市己斐町から和裁担当として今沢恭子氏を、呉市から洋裁担当として川本妙子氏に、就任を願ったのである。

教員室は、前述の如く校舎の中央の棟の階下にある十六畳の間の座敷を充當していた。教員机は以前から持っていた古い座机を寄せ集めて六個の机に向かい合わせて座し、その横に私のベツトを据えて、教員との会話・会議・指示を行いつつ、教育を進めていた。

## 夜間部開設

勤労青年の教育機関の必要性は、私が公立学校に勤めているころから考えていた。働きながら学ぶ「これほど尊いことはない。私自身がそうしてきた者である。こうした青年こそ有望である。こうした根性のある青年を育成したいと考え、この年の六月十日から夜間部を開設した。生徒三十二名、主任教員を菊本ミサ子氏にしていたが、当時は洋裁担当の垣内、和裁担当の藤本・小田の先生たちが校舎の一隅に住宅を構えていたので、それらの先生方にも夜間の授業の一部を担当してもらっていた。

当時、他のことは知らぬが、本校の先生方は、超過勤務云々などという不満は全然なかった。それはそれは真剣そのものであった。私が過去を大事に



広島県可部女子専門学校研究科卒業生 1952年

## 免許證

竹本シケ子  
昭和二十七年五月二十五日

## 洋裁

頭書の科目の教授者  
たることを免許する

昭和二十七年五月二十五日

可部女子専門学校教員竹本シケ子  
第四號

するのも、こうした先生方の苦勞に感謝しているからである。

夜間部は、校舎を可部町に移した昭和二十九年で閉鎖した。

二十六年研究 二十六年度は四名の研究科生が卒業した。

科卒業生の就職

菊本文江さんは日浦中学校の家庭科担当教師として、竹本シゲ子さんは山県郡豊平町の本家四郎先生経営の花嫁学院に、それぞれ採用してもらって赴任させた。

正畑シズ子さん、有馬富士枝さんの二名は、当年新設した一年課程の師範科に籍を置き、学ぶかたわら本校教員の助手を勤め、師範科を終えた。この二名は、翌二十七年からは本校の教師として採用した。有馬氏は手芸、特に日本刺繍が得意だったので手芸科担当、正畑シズ子氏は和裁担当である。

二十七年 二十七年度は、本科生一三五名、研究科・師範科二十八名の入学者があった。在籍者一〇五名、夜生徒急増 間生三十二名、総数三〇〇名の九学級編成で教員十二名の学園となった。

ようやく発展の緒についた。しかし、決して自惚れることなく、ますます緊張して、和協一致で教育道に精進することを誓い合った。